

◆ 夢の昭和基地へ

12月23日、いよいよ昭和基地に向け出発。第一便は、隊長やしらせ艦長、越冬隊員を乗せ13時に飛立つ。私は第三便に搭乗予定。隊員公室でその時を待つ。皆、緊張の面持ち。「第3便、搭乗準備」の艦内放送が入る。階段を駆け上がり、艦橋で名札を黒から赤に裏返す。公室に取って返し、荷物を背負って01甲板（飛行甲板）へ向かう。検量（体重+荷物<100kg）を済まし、CHヘリを待つ。



しらせ離艦時は、名札を赤へ

そして、遂に13時50分、私たちを乗せたヘリは昭和基地に向けて飛び立った。

見下ろせば、海氷に覆われた真っ白な海。遠くには氷山の連なり。興奮冷めやらぬまま、基地まで7分のフライトがあつという間に終わる。そして、昭和基地に到着。56次越冬隊員の出迎えを受け、昭和基地にその一歩を記す。「人類にとっては小さな一歩だが、私にとっては大きな一歩」と、一歩目を写真に収めようとするも興奮してすっかり忘れる。しかし・・・、なのです。何かが違う・・・。白き・・・ではなく、岩が露出し、足元は土。いくら夏とはいえ、イメージが違う・・・。夢心地ではあるもの、第一夏宿舎まで歩きながら、その風景に戸惑う。過酷な基地生活の幕開けなのでした。



CHヘリに搭乗



56次越冬隊の出迎え



ここは・・・、昭和基地？

◆ JARE57 隊員紹介

小林 正喜 (58) 夏隊 機械担当 埼玉県出身
テック・マルコバ

53歳の時、現会社を起業。「機械ものなら何でも直す」を売り文句に、草刈り機からクレーンまで。ここまでの道のりは波乱万丈。高卒後、訓練校にて自動車二級整備士の資格取得。自動車ディーラー勤務後、26歳で競輪選手の夢を追いかけるも不合格。再度、会社員となるも29歳で自転車日本一周の旅に出る。いつの間にか5年の長旅となり、その間、夏の沖縄から冬の北海道に飽き足らず、日本百名山を踏破。厳冬期の冬山単独行も数知れず。旅の途中で生涯の伴侶を射止める。クレーンを扱う会社に入り、修理部門で実技を磨く。パキスタンでODA委託の100tクレーンの組み立てを行った経験もある。南極ではピステンの修理、クレーン組み立て等を担う。余暇には、持参したMTBで駆け巡りたい。皆さんへは「人生は一度だけ。思い残すことの無いように」とアドバイス。深く説得力のある言葉。ここでは書ききれない経歴の持ち主です。57次隊最年長。



クレーン操作指導中の小林隊員

南極授業では、生徒の心に響き刻まれた言葉の数々。ありがとうございました。

◆ 食彩 ANTARCTICA

昭和基地生活、最初の晩餐はオードブルでした。白ワイン付き。ご飯はレトルト。休む間もなく、糧食の運搬作業などを隊員総出で行ったため、仕方ない所。56次隊からは、チキンの丸焼きの差し入れ。

おいしくいただきました。



第一夏宿の食堂

